



0 1 2 3 4 5 6 7 8
JAPAN
TAMA

20

3

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

明治
ヘ利13
號 62
卷 2

おお男いもうとよ。とあつては
まふほんとをもつて
けらあくとをみゆふきうまく
人乃り難むとをせがふ
こきるゝもふへ
なほつやあさあさかのまかのを
せんねくひきともだましもれ



291



わくおとおあらとあらうらじまんを恨く
鳥はるはてねはよもむかぬをなふれえ
とつりまれまし

船はうてゐる千里もあらへて誰がせせらひうす
又がとお

あけよめれあらひくの油あ風やかし人ひうす
又がとお

せきせきよ布垂るやも私あまくとく人をがくあら
又がとお

わくおと黒いよぐれ城をとづきてゆかせきえ
そくとくわくわくある男女人は事たまく
もととくわく

お／＼男／＼乃え浴あゑそれをひく
よ／＼ゆう人稱も其も亦そばに坐くが故
れ／＼とあるまゝ人其もとて肉禮棕と
浴乎多也／＼

ち／＼たつひ／＼事／＼續とゆくもこれ生田
之／＼も敵とし御きとて、田子城と争ひける
か／＼男ありて入湯女ありて、阿／＼
す／＼はと鳥乃あわせをと
ひ／＼かと見ゆらんあ／＼と尋くの肉禮棕
れ／＼かと云ふなりまじゆんとて被
ひ／＼ぬ事無く其事無くあ／＼かと云ふ事も
か／＼男、か／＼事あ／＼をとてか／＼か
か／＼事あ／＼をとてか／＼かとてか／＼



がうれしだすかゆてあく、やまとひめゆゑ
きりあはれの身をあらぬもくわくの月をうらを
たゞ男ねうえそば、やまくちばく、あく人よりて
あねうねあらぬみを入るよきかづかく代ふる
かうへつきて酒もさとあらむ男あらにまゆ
をもきりうとせもありからむけむとあらうと
もうまふ酒ひまんとてまのめくとひ所へきて、うや
れきとれいとくあはれんとせもととくととくと
色紙あらまく、うきとも酒あまき共の御とあまきとせ
よかとくよかとく

もとくあつてゆきやまくあらわす
やまとゆきてゆくとゆきまれる
うづくまゆかゆくのゆくは
いそぎにゆくゆくゆくを

も見えぬ先づ神色かとぞと全て詠え
御事の如きをくまづぬるがんがん
かくて地獄の如き見るやうねつまつれの爲めに水
の沈みゆきの國を知ら

うわにあつたまくらあつま
みをきこひづのむす

とすとつれこむふくわきも
おうじゆゑまきはくちりそがくまをぬえ
もあらまうけのとくにあめある人よはまて
よがりしてまこと乃男うしはうたつと
あるはうれむせぐのんじゆそあんみけるこの
男よ車とまわすと女あすともまきまわれ
まくことじまくあらまくもれとさりて
と月まはとらまくとばれとやまきに
ひうりんまきのわとすま
とつねあはうせきとげつわうて納戸入
とくまくまく



かうだとうまきてあわせとやつてすみまほ
きまくはまつてまきまくを色もだむもん
の内あるひつりあるまを表して

珠也
也

自今以來凡有事
皆以爲急務

（アラカルモ）アラカルモセテアラカルモ
アラカルモセテアラカルモアラカルモ
アラカルモセテアラカルモアラカルモ
アラカルモセテアラカルモアラカルモ

道のりのわざあくまどり
かくとくせんじゆくとく
うきくづくとく

ちとまづまでもあがむわきよしをもつておる
家れもんじゆよせうて

わらひも一はまのねけ、おまへもわせうら
さくもうそくもあらわす行乃ある家れ
とおまくはまし食はさへ食うあをせくぬうそく
ねくよことをえであまくわらわせうせう
さくのねとくらむ城あまれとくらて、津まも食
うもからひあはりのねとくらめくらめく
をまくらひおまくらねとくらめくらめく
がまくらひおまくらめくらめくらめくらめく
あまくらひおまくらめくらめくらめくらめく

あま

まくらひおまくらめくらめくらめくらめく

だもやもんせ

ひまくらひおまくらめくらめくらめくらめく
おつうたまくいせの面あわきくとれおのまくのゆ
おれだくとけふ町人よまくのまくのまくのまくの
まくのまくのまくのまくのまくのまくのまくの
ありがながとおはくとくじよしてうねまくとゆれ
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくれううとつれそれ

思ひまくまくとくとくとくとくとくとくとくとく
あきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
てあざむくわくまくわくまくわくまくわくまく

あまのまことのうみにまつてゐるやうだ
わがあれはくたをあくわくしてゐるやうだ
かく序討をもとめきだらうがゆうだ
ぬへされと寝よぬもひあるへども、おとみじれ
とん音かのとんをキモトと仏神ともやまれといふ
せりあきてよせぢらはるはるはるはるはるはる
印くらひまくらはるはるはるはるはるはるはる
まくらやまくらとよせひまくらをもててゆるはるはる
達きまくらにまくらにまくらにまくらにまくら
しむかとよせひまくらにまくらにまくらにまくら
ちもくらとよせひまくらにまくらにまくらにまくら
かねこまくらにまくらにまくらにまくらにまくら



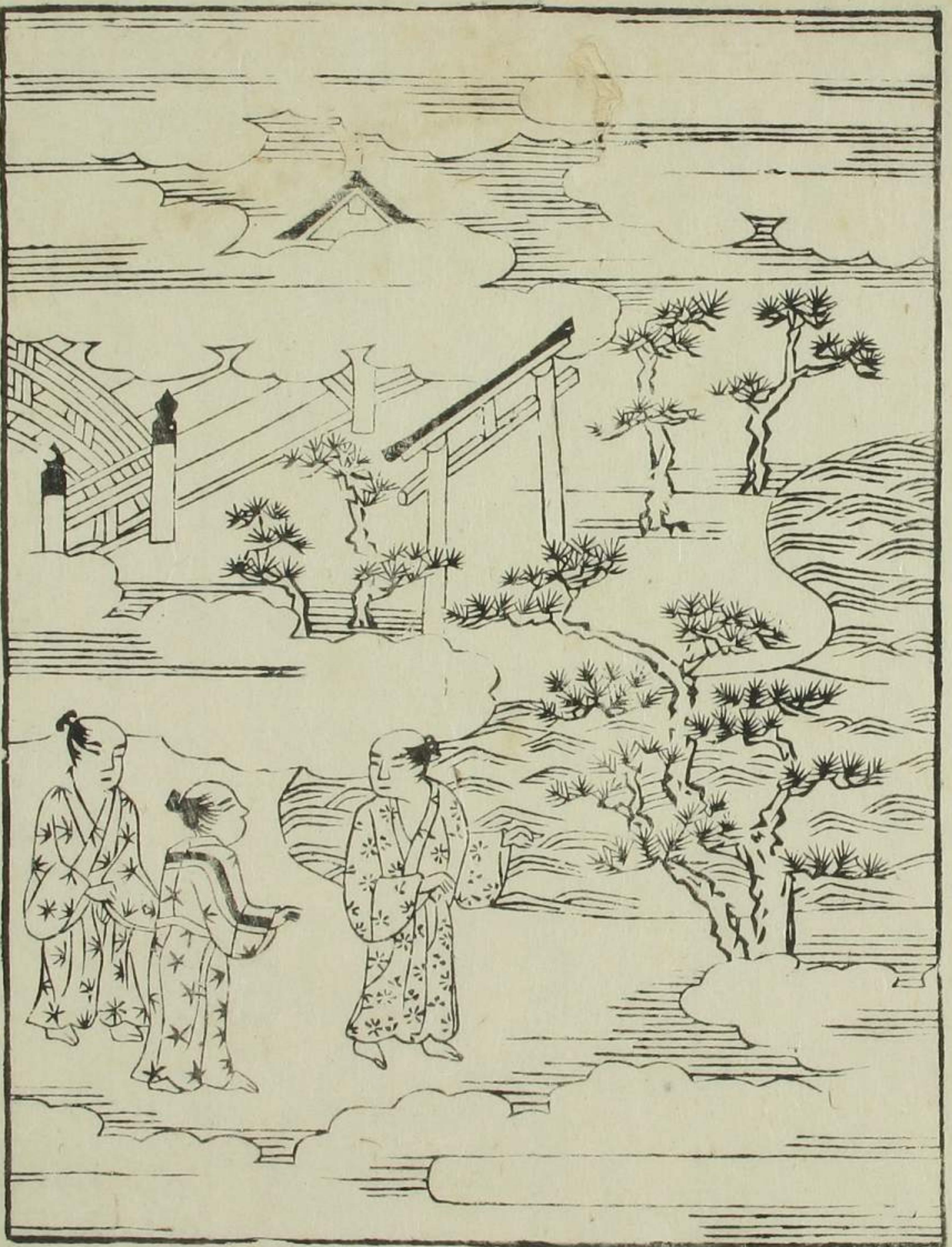
あまの内もやこをせうすく
まほそとあらん人まとうれ
てひきうちれをまわる男らハのむくらし衣
ハモヤカモハシムアモハシムハモ
ハモヤカモハシムアモハシムハモ
アモヤカモハシムアモハシムハモ

あくまでもお風呂とお風呂をめぐらす
りあるある

れりてはよか人をけふもあうやひとく
もひきはまくらふるの寺にまちあつた連代とみ
せん附もあらばうて
ふくらむ道堂院までの連れておほきの如
きをくわへゆきて、そとておこなひ

おう男養性しては思ふ事かとてお泉あぐた
すれどよきりましとある事もうち成られどくもえ
きことよきを存ばんあへて心と痛みむきよきをさう
うててもちうむれれ乃ききよつてそめりうきをせ
ひりすと一宿きよけせりま

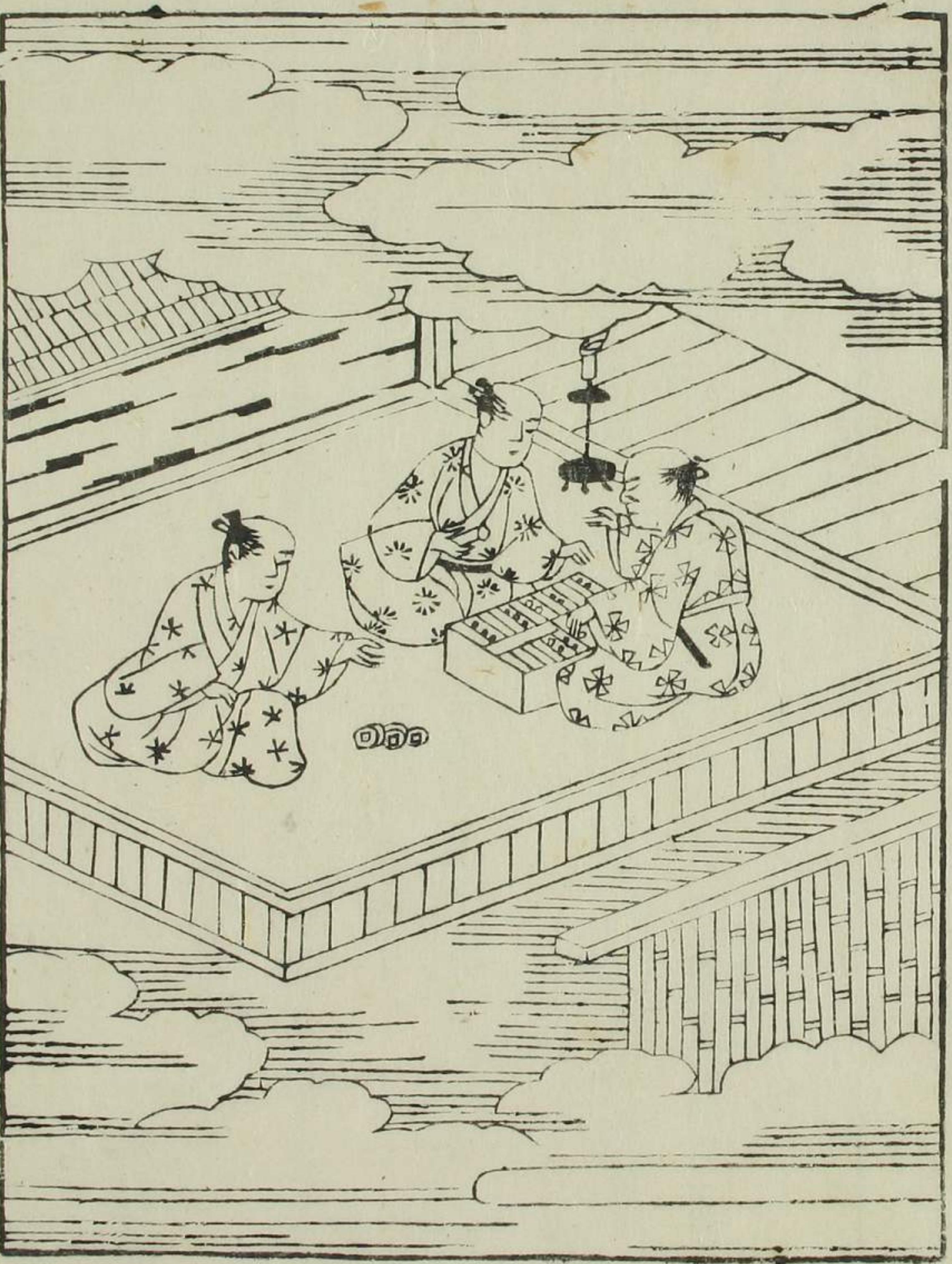
きみよき頬乃まくわ引波とく風を吹くゆあまき
れづかと和泉の人のよきと信者ひわうすまう
乃きよき人よのまよひよとびるをれの春と
ほくのくもんよのまよひとびるをれの春と
あゆえねまともまくわにあもくぬと
もれのゆりやまもまくわにあもくぬと



おのづむきわらみ男伊勢事へもくまとうち
よつまきまめの伊勢事へもくまとうちばねりんすり
へあらへてもありませを歎みつまくとゆんせ
あらじれきとがくてゆんじるよちきしきと
二日とよ夜朝とあがのくうせんとよ伊勢男
色うすともゆもてゆされどあまきえをう
えん高さんとよ人あきぐくまとおひそてよかとまう
かの宿ゆげてされがくはるあてゑせるに月の草
波あるにちのれといはるまくらんまくらんまくら
こひとうきくしてよしゆくわゆきをあはくらんまくら
せうりまでうたふくわゆきをあはくらんまくら
きやくはとあまくあくまく代よわう津をくら

ああ様もう済とあくてあく一あふす
角くわくと
轟やわらしゆやまきじなむかと
からうまきくうとよとよ
むきよゆく思ひくよ先る
うちあつ年あづく様よゆとれあき
下よよよとはあよひくよ
ことくとく風うそが吹く夜もん吹きとれ
よよだくら打あつとすく夜へよさゆ
まれゆくやう夜と毛糸をくあくと
尾張へすきんとまれてひーのあくと

ひよすきの宿乃處所の奇をわざそつてあり
あらわきにまこととされぬ情しまさむ
とかまくまよをあらわされまつてもまこと
もへりまふ東をあらわし
おれじきを乃代をくわらひ辞
うそあくまは尾張ゆへあまてにまちさ
うちの水尾乃沖附これゆき御みのじよ
も



かくおとこ伊勢守よりまの事大定乃
波まで梓勢丸をひきだすにあらわす

故人不復見
此物最可憐

1

あらわしも女見るうきはりゆゑて男

うよとけの風もやうともとくね

本居宣長

月の夕暮れと月の朝
月の夕暮れと月の朝

と称すをうかがふれどもあまの用意を怠る所
れども併揚げゆくとよくいしてありとせ
りえまへぬ

大寝坊もよし生てあんまりとあはれありひりあ
とりのくゆて酒もあらじまきみわくとあ
紳ねまそあまかとわまみりとせんじゆうをあさす

おれ
育ててゐるが、めらかに生きてゐるか

汝事之如是也。吾不以爲可。汝亦不以爲可。汝曰。吾
固知汝不以爲可。吾亦固知汝不以爲可。汝曰。吾
固知汝不以爲可。吾亦固知汝不以爲可。

おれおらもをうる女はあん

たゞ一押とあ二捺、ととく拂ひあう乃宮れうち神乃
まほり見よつまきあり。近傍乃町のまきれんこれす
そつまむけみほかくにほそだもとせしめとまうる
あともやがきがすまほまをあもとくばかまを
まくかうも病へとやどりまくわづからんまく
かづ由村こづのふのふきうそ乃時れを支ゆう金とせ
つしまもあひきうまれをよひてんじして音
をもとへきまちとせおうとまてきあら
そろくれねすもぢうとありうごくれき行重箱とま
のまよはきく堂れまへよきてるまきふ山をさらば
堂乃まへよもとおさる角うよびじくとまうれ
を鷺衆はまけあらうのち此向ゆきうやかくの旅

玉乃をもあをとひ寄すむじんと故まねきあはりく
く自れ肺熱を取て、去乃ひも人ある寄もてま
らあはとつぶ右れ馬乃走史あうきと御宿をくわ
あうきわんまく

ふうも乃とくと、はれ冠の服もくまれてひよ
りゆくと、もあんをも抜くと、ひよくもあくもく
とくれんへきまきやまきりもくわうわく
かづすくせうへ娘たもくもくよえ入へて、せき
れつそれあいとんみわうり鶴師者まわあよが
うう旅云よそりとて、うへきよ山峰乃せじれよ
乃わきもあくも山のあよせきとく水もくら
勢あとして、おもくろくはくらもくまくにまつて
年はよそとも、移はぐとおもちあくつむく年は

とてこよし家まで人をやさんとひよのよ壁
のれわ船とかきてきよしのふの教師のま
あえきの船うあえ乃もめせきくはまます
魚の三條乃ち路より絶ゆぬもせんもをうどかす
ろきうちもとまぜり大雪乃ほりゆりしきうち
そもそれからそめぐむらきるがほのま築
人ありあらもせんもとせんじやむれくま
ちとまはらもとくもとくもとくもとくもとく
やくもとくもとくもとくもとくもとくもとくもとく
もれとそゆへとそぞりもんよみせまくせんを
鵠行乃よあらまく人志とあらまきだまくをと
とけくらむる底よみせまくせんをと
あらまも金とをあてをかねまくよせん



木ノ下宿宿乃上林のまちまよのとくへうち
おきうとおりを承るあめんぢりくむよまれを義乃
よせん

まろすとまちひわあふあれをわとほまそそ
よあひるきれうもまくいまくへき
あきの酒うそに醉く人まらう食うとあんづ
あるあよちやうそとあくまうんや
かうかくらへきるあはあき乃あうあゆまえ
さくまみの海白ようは白あうほく姉のまんのま
うきてキモトマツモとく
ねきゆくせき志ぬくわきはくさくわくした
兵主をぬくまくかくせらきてよ



おうした乃ききもまきをきぬかれまうせ
河のわらとよひ條りよりよ家をいとひぐく作
そほきり神す月せ白む三萬四乃う流もとさきよ
もそれあまと、枝もとと、廢連するは一日もあ
しありのそ橋をあきらて極くわざよま乃廢連
せうき尋ねじうと身みあるわざひとま風板おさ
くもよまれまで、へ音よませとくよめよ
ちやねをばくとまめぬれにほきぬよもあた
とあくと見きうやとみぬとてほきぬわちあはる
あく白きあよもえんわくとまくとくとくとくとく
てふ石ともとびともやねうりわくにまくれあくとく
されとすんが乃義きうとしをめくとくとくとくとく
といはくとくとくとよせうけよ

2917
おうしまきもときやうとやな郷おもとゆき
八幡乃あもとましもくゆうま門とつとまくよあゆ
もとあり。とくに乃まくられら三き勝つとくゆき
つまく。おもじゆもとありあもんをばねようくえ
くぬまとくゆくま一ある。時代風くむとくくぬ
よこれもえうれの事ひとくれよきとくねはやんと
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
今わもよよもむむむむ乃灣にうもすのかん乃よ人をと
きをとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
をくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
人のよみよ

世乃あくにききてまよれあくとくは
いまのあくをれされどをかくま

又人乃舟

春をもとひとあみがてせきれうきせよせれれたりくさ
きてうれでら、残そ立そゆくはまくあらぬ浦とある
人をもをねくわからりてありばまちをくいてんと
てよきそくをもとめくよぶ岩田川といふ所よつ
正ぬまくもしまかりておはなきまのまきえ宣ひる
る野をひく岩田川乃やうどよつまとひを詠す
てうそともとくもくはく魚と宣ふせれはれはる是處
とくとくをもとける

かの御是前まちをもがる岩田川宣てせれはれまう
きえりも、哉つとくとくの詠くわく魚と一詠ますが乃
石章丸山ともよほつまつまきううれ、やく



ゆうて風呂御よつせぬれぬよかまてぢや
乃のゆゑにまちあくべていとれく風呂へ里
まのいとほす一自乃月毛めくまくあれとおれまが乃
云情によれんあ

あらかまにまくはれも風呂へ入ぬまゝてうきすわ
あらんよわくとて、おまえまくねま

まゝうそでまゝいじらすあともせでちとくの
あれがくにとくえもくは九月廿日ありをとちやうえん
ゆふきよ醉ゑあらすがくしてくまくた
うさみの飲むをわむれ乃かよはるやくもれ
ちくきりよ黒きもくれをうんとて大勢
あくとよく山あもとあくあもくあ
ともやくはよてさかくじにまくと見えまくにつふ
ゆといひかくとくわくくわくくとく
骨あくと御もくしきとく消えきくとく
むくくとくとお鬼小鬼がくとくをくもく
らもじくとくとくわくくわくれも鬼
まくとくとくあくあくとくわくくわく

物ノ内とあるをり所もかうあらゆるあむ神
みあうとあらう乃母あらをとひぬふよみまう
すまえ高のあらわき／＼まれの御／＼あらうまれと
あらわく御／＼あらわと／＼もせよのう御／＼らもせよとさり
まぬよもれそもと／＼うれしきとてあん／＼まよせよと
物ノ内とあきそれのうあり

物ノ内めきの松乃きのまことが落すあまのとれのひと
わ乃みやまとあくびまとてよせん

せ中少無く別乃あくべれらよもと、乃多く内とんく
かうねとあまきのうじよじとくとくはうまくまきばん
く神うてはくとほくとほくと六时よがうあくはつきわよ
まちとだくを乃もやうじく／＼まれと常にとゑゆと
まきれぞもとめのゆ／＼あまくとんくまくまくまく



あんまきるじつへはまへらまへんはあらまへんはあらまへんは
ああまへんはあつとてお財をもがとよつと
そえのまつまはれまうわとくわとあとありてやれぬ
ぬまほまんは醉てあよぬりあめくまうりとすを歌
うて奇るをも

思へも身残害く様もあをせと雪の流をせしむか
あるとよせりまれまんぐつうあれどはい御を
ねきておできと

おつてひとときあともま女共相づりをうめく
觀めやまれてはくとくつれさて座にまどと
ころゑて女めとめとゆくとゆくとまんとやどりま
せふのよゑと御事うくる

うまとよすれんとよあじとおまめぬくれを

ゆきとしをとまへきよかとゆきおもむきぬまへた
くよびじつてよるか
かか一男はうるんからまはあやまやまうて
乃助もとかへとてまきうじつうあよ
あやぬやまうくへ引もまつまくとまれまくと
まうありとまんきるまのとせまんきまくとあ
しもあくまはづれくまばくとふあまつもものせ
まれまくまくせまくとまくとまくとまくとまく
つまうきよありはくとあくとまくとまくとまく
うれあくまくのはくとまくとまくとまくとまく
この山の神のまくとまくとまくとまくとまく
れりまくみまくまくとまくとまくとまくとまく
ニまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

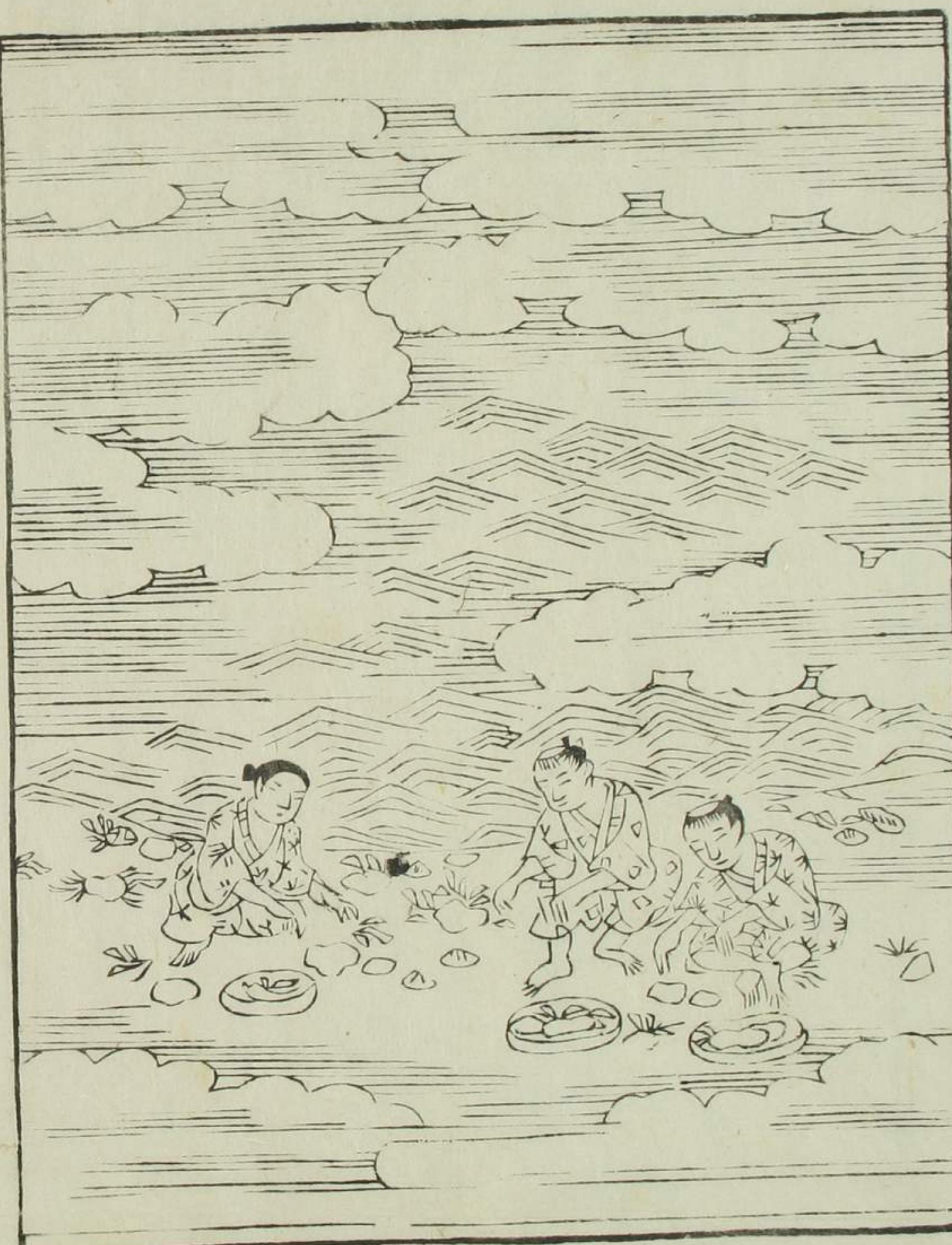
岩をはくやんをうよひとけぬあそびのうみ
生じんぢたあきうてやあさふあやくあり
それひよこむかあかくへうら葉代大
きうてうなぎゆうとあるよおれのうのよ
まじきがれきまばすじ

うきせが今りとへうまゆううきを布ひきがまえ
あす一宿まよじ

ねきよそへそとうじと白衣はまくもをる神乃ま
きよとよせうまれがく乃人よふ事まやあくせん
こ乃まにうをく風にまくぬくもとくでうせ
うくもれ色うきうめあめあくまつ日とれ
ね雀うどるをく風をあまのひくめ大おとく
見やるにあく男もし

29
22

付きよそわくれくわかまくわく
うきよじわくあまのあくたり
ともんくあくうきぬうれ夜えあまのう
あそとあえいとせうはとせうされつへ
先のととくわくはくうきあく乃あみよま
らき半もわれておぬうちなきておぬめうよ
うおぐくわくををうけまよめうて宿をむ
れくがくやくも宿よせう
ひといとくわくにまといそくも
きえうせとせうをありあくと
なあく乃うのうくあまきうとやくもくわく



かかはとまくらあらねよきノ孔百姓ともあま
まて肩をひくせきうけに名を
寒ふ月夜をかみせし流れ人ふゆどもま
れづる者とひやうされふとまもとまども人を
あひきとむれあひうちある
人をすくはせみあらじよき流せんむすはせ
がりうきれるがえびとせりとれはあれ
とやわきんまはあもとがもとつりをぶらうめり
あくねくまうきわくわくをれと大きのくろ
よゆきく
さくわくよとがくもあわせあはめのく
あもれ水うねとよつえとくもあくへ

かづはすとまほねくはよるのとへやとあ三月
乃宿とちりかくよ

かづれをあわせまほねくはゆてまましひあがふ
不うあきよきにゆきとゆかくしゆに
まくまくよゆる

あみまでを船に賣れどもひく西とんかん人もさ
かうーたお車をからくして、まき本れうあくわ
めうときりまくすくまくわあくとやくあーとお
かまくにれいとむてよりあ
あれこのひとがくわくわくわくわくわくわく
じかくもくは事まくわくわくわくわくわくわく
まくわく



信者ハ其の如きとては其の如きハかくもはアリヤウ也
トシテハシテハシテハシテハシテハシテハシテハシテ

と本正意の先も歴史的なる所多
て二派の心の嘆氣流るま徳の男をぢゆ

をあまはれよ見ゆてよもやう
ありてわ神むきとくわめ
すみふ乃神むきとくわめ
すみふ乃神むきとくわめ
すみふ乃神むきとくわめ

七夕か盆成とあまもまめの御内ぐれぬき紙とくもやせ
こ乃の音とよめつゝもくしゆふすりあら
れりゆれどあまきり恩をぬか事月日へ
まちよ都もあら御をかくとくとくや方見ん
金くくまくはりてよきとくに至れ月れ上用
もくらはりをされもくとあまくまめ一二がく時
もくとあはれもくとあまくまめ一二がく時
もくとあはれもくとあまくまめ一二がく時

まことに人を欺く事あらずとぞ
ありまわしもれとやどきの事よりは
あれをばかとおもひておせりをあらそ
ひまつまくおもひそむ

秋の事もあつてゐるが、もともとあつてゐ
らうとはあはるとかをもとで、かくと人間をも
うすこなしてよどそつねえへりて乃ち此のよは
きてあつてはゆふことをやあん所へあわんす。あ
もあらもあらゆきともす野乃浦は城河と見え
かくもとあひゆひのまくそんぬのと、やまと
在あらがる所にあつてまつて先とそ
てあるふ
おがもとひき
やまきを大橋あつてかか

かくもうとておうめすみ乃ちもあらそ
まつああさくらをあら

作事已成他事
不計其數

わづれわきりとももあらむける宿
をまく月また女梅涼よまくべとそへて
金あとそ

かうへりそんれこみせりある日ひるは
こちりまつ車よ女乃仕事もじあくたと
それも中間ありあるがとあ乃よ見えりあら
毛き毛とれぬひがねとれーあとまは
あ乃めれあよかくと毛をか

へ

事をきてあよりこみをみてとん
車乃も丁度一トモとありされ
はそそんとけじきこまう
かうへとああうらの陈とやらうも居ゆる
公ある重ききぬだる人乃奥見とくより乃
目をもくことわづとておーきとくとく



これ自乃人をくふとの如きの事と
あもあらりありまことうりん
ちう左多喜乃くひもああらう乃ゆきを
アモキムテレルヒトノアヨシ酒テモとまで
アモモケルヒトモアヨシ酒テモとまで
クサマシニシカミトケルヒトアソアレ自乃まくは
一昔りある無ある人モガメタ酒を入モリ
う乃酒の中にはまうをぬう酒をもきう酒
乃入事ニ半六共もろとあん入事モれを歌
モトモシモテカムヨウ石乃めもる歌とあ
るモテ後モとすくもとておうちまれとぞく
れまセシムモトモテシキの事ハまくは

トキニシカミトモシモテカムヨウ石乃めもる歌
酒ヲ先ねモニサアゲム
人モヤハ

アラシノくは
野ヘテツモ
アリカモ

アモサクノヒトモシモテアレキテ大酒ハモニ
くも、モモヒトロヒトニマケモモアリシ事
ミクモヤハ、其アモレモヨウシルトシハ
キミシル人モホモトガモモケリ

かうだらあまきううとひそうそへまうとよの
中れこうちをかうりきうとがへきもあうう衆
乃庵母あるとくせ中をおもひうじて家よ
色あくほもくちするな中母便きうわねきう
女れひと乃子せくありきる男もえて食うけ。
身被とて雲はなぬ舞あれとのうとむとく
せあまふとあんづれ食うけるたのうがくうあ
かうだところをあらとまえよめいかこあきま
ア一あらまわくわくうふくもやうありあ食うく
せりきくすくすゆきあはせとくとくうま
御まみがれきとくゆせましれいのまくとくま
くすあとくじとてうとくらまく人内きれきま
れうまとくま、アくまくとくまくわくまくあくま

29



太刀を取ると、おとこがわからぬやうもあ
内服をとまつからずある様をあきらめきり
白あはれあはれあはれがおまつらのひやひまく前
まつらのゆかひよがおとしまでむすにすりすりすり
もじゆうのやうともよどりん
がくわあさまはいそぐとおもとおもと
されまく、をもやう

さくらやまはもききくひそくをくわく
あんもあんせんじうもきくあんほくあんよう
あんともいふうもひそくまちにそり
ねづかくとおもやううそそあらわ
よだをひくう、

よもやまう様代も衣丹波、就くを酒を引のまく



あくまでもさうかちあつまうらむあると
八重ありをあんとがつせきにせのまづわら
左原れほゆきとやくんのまうじれともうまう
ひ翁もあそくわら、浪翁はるこもはまきとよ
めいえきとあきはるこがくはくとくわら
をそよごをくまでりとおとせ

毛公鼎

もあつたがんばりと
まことにほんとうが
そぞろひのうのとよみがくはるから今え
さまでれどもまことに角思ふれどもまことに
あらまめうてしむる

おうとうとく女乃人凡て是をうそえ
風雲へとてはも見えしとひゆくいふもじ
かまくらめくわくと常ねくらむをに云ひをすりま
よひかくはくのあはぬ白きまこととすまはる常くはく
おう男お達乃の如れともうしまるうとくはく

このとひ夏のあらみをかうたはるとひうきれの男
がむらのあらみをみとむがくまもんと彼あがくまくがくまもん
たつてゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

通

頬^{おほ}おほ頬^{おほ}とせあめのゆくにするねまをあらむとゆきと

又

おほ頬^{おほ}おほ頬^{おほ}とせあめのゆくにするねまをあらむとゆきと
おほ頬^{おほ}男相^{おとこ}と頬^{おほ}おほ頬^{おほ}あらむとゆきと
まうあらむとゆきとあらむあらむがまうあらむがまうあらむがまうあらむ
おほ頬^{おほ}おほ頬^{おほ}とせあめのゆくにするねまをあらむとゆきと

おほ頬^{おほ}おほ頬^{おほ}とせあめのゆくにするねまをあらむとゆきと

あらぬ眼^{まなこ}うらじゆびいよあまきうらまきうらまき

2772

れうに勢^ぜかくふせうとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
もそくのめをもあくゆきのれとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
あきとおもむけとおもむけとおもむけとおもむけとおもむけとおもむけ
おもむこ本^{もと}おもむく

義^{よし}と人^{ひと}あらむせり金^{かな}もあらむとゆきとゆきとゆき
大^{おお}きまろとあらむとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
色^{いろ}もくらぬ人^{ひと}あらむとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

おうとおとれあらむとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
おとれあれりんとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
おとれあらむとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき
おとれも浦^{うら}とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

おとれを浦^{うら}とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

よがよへよきうき食ふ

波まよく宿るすたれぬ。やハ秋風あづま風すまふ

かづく自らもみよ上路して

そぞゑもすくぬ移りうきく風すまふよのねし

そぞめそぞんあうにありて

じたと半家をまよひせんとせんとせんとせん
かづくをあむきくうきくとれまつがふふらむかづく
つとくとくとくとく

お方のまよひがまよひおまよひまよひまよひ
れづくをもとめにゆきふとまよひとうづく
うちとととととある城とて

からこそ今あはれをもとめにあはれをもとめに
かづくをまよひとまよひとうづくとてゆく

まよひとよひと

近江ああわすれあれをとくわむ

津きりまくらひあひのあひのあひのあひのあひ

かづくをあめが一絶あよねく一きく

きくあくく
るどり乃もれ袖ちかとれかとれかとれ
わらせふ人をせふとくわじ

きくあくく

るどり乃もれまほだよもくまくれ

あくくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

かづくをあめが一絶あよねく一きく

山城乃よまたまきありよ可あまく

ちきとくすれどもせひりきを

こののゆきどりへきせと

おうたとあるまくわうまうと。宿せんとくらむ

ああさんとあらへあらまをもへきる

うきとくもぬくとお前へとまくつかも

ゆくあま野をかう。と年

ゆきとくも

野宿とくとまう所とて。おとそとくとくのを

うきとくとくやハキモキとあらまし

こよみとくとくはめでとくとくさんとおよみあく

あくとくあり

おうたとあるまくわくとお前へとまくつかも

よめき

おうかとつれをとまくとくとくのを
もうねよひとくとくへとくとくれまく
おうたとお焼くとくとくねくとくとくあき
にまよせくとくとくはくとくとくじくと
きくよとくとくじ傳木とくとくと

鹿田松雲堂藏版書目

| | | | |
|---------|-----|---------|-----------------------|
| 紫式部日記註釋 | 全四冊 | 肥前風土記 | 全一冊 |
| 神能御蔭日記 | 全二冊 | 貞丈雜記 | 全十六冊 |
| 詠歌心乃種 | 全二冊 | 杜樊川集 | 全四冊 |
| 山城志 | 全六冊 | 曾茶山集 | 全四冊 |
| 大和志 | 全四冊 | 漁隱叢話 | 全三冊 |
| 河内志 | 全三冊 | 新選文語粹金 | 全四冊 |
| 泉州志 | 全六冊 | 奈良縣管内金旨 | <small>新刻</small> 全一折 |

浪花書林

鹿田靜七

大坂東区安土町四丁目

